

# 教報 如大地 東日本大震災特別号

教報 如大地  
発行日：2011年9月1日  
発行所：真宗大谷派 富山教務所  
富山市総輪2丁目8-29  
編集：富山教区如大地 編集委員会  
発行人：辻森 正顕

## 東日本大震災により被災された方々に対し、 衷心よりお見舞い申し上げます。



教報『如大地』編集委員会

三月十一日に発生した「東日本大震災」は、被災地に大きな傷跡を残し、今もなお多くの人が、癒えることのない苦痛と悲しみの中に在ります。今年、私たちは、宗祖親鸞聖人御遠忌法要の厳修年を迎えましたが、この震災を受け、「被災者支援のつどい」の開催、そして「被災者支援 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」としての厳修となりました。

「僕の御遠忌は被災地と共にあります」と仙台仏青の若人は叫びます。私たちは、この声を何とか受け止めてまいりたいと思います。「忘れないでほしい」という声を留め置いていきたいと思いません。

今特別号では、今後の富山教区内での継続的な支援活動の展開を期して、教区内での救援活動についてお知らせするとともに、被災地からの声を紹介いたします。

### 被災地を感じて

— 仏青「みんなの声」 —

瓦礫の中にたくさんの人達の人生があった。涙がとまらなかつた。津波で亡くなった人達の「いのち」が僕を突き動かしている。放射能で土を汚され外で走り回れない、子供たちの叫びが僕を立ち上がらせる。何をすべきなのか。何が正しいのか分からないままに動き出した。避難所をまわって物資を届けた。お風呂に入れない子供たちにお風呂を提供した。子供たちの笑顔が未来を切り開くんだと信じて、一緒に腕輪念珠を作ったり、本を読んだり、本気で遊んだりして避難所を後にする。毎回のことが子供たちは「また来てね」「いつ来るの?」と聞いてくる。「帰らないで!」と手を握り「返さない!」と部屋に閉じ込めようとする子供もいる。毎回来たがまだ待っている子供たちがいる。僕達の出来ることは限られている。人もお金も足りない。電気・ガス・水道も通っていない避難所はまだまだある。「食事は一日二食でメニューはおにぎり一個とお菓子少々です。」という話を聞いて愕然とした。テレビの映像だけが真実ではない。僕の感じた被災地は復興などしていない。今を生きている事だけで精一杯の人達が沢山います。僕の御遠忌は被災地と共にあります。バケツリレーの中に、避難所の人達と語り合う中に、親鸞聖人はいました。子供たちの笑顔が、おじいちゃんおばあちゃん「ありがとう」が、お念仏でした。地震の規模が大きすぎて僕達の手だけではどうしようもありません。待っている人達がいます。助けてください。今後も引き続き活動はしていきます。

仙台仏青会長 佐々木 道範

### 仙台仏青

#### 《真宗大谷派仙台教区仏教青年会》

「親鸞聖人の歩みを縁として、それぞれの現場にあって一人の人として立ち上がって生きていけるような、そんな活動をしていければ」との願いにどう青年たち。

東日本大震災を眼前にし、被災者支援活動に奮闘中。被災地にお風呂を設置するなどの活動(仏青お風呂プロジェクト「BOP」)から始まり、現在は、被災者の生活支援活動を継続中。(仙台教区：岩手・宮城・福島)の3県)



### 真宗大谷派富山教区の災害復興支援活動

#### 《富山教区内での救援金 — 宗派救援金口座に入金》

富山教区においては、地震発生後の3月14日に参事会・常任委員会を開催し、早急に救援金を募ることが決定され、教区内への呼びかけがなされた。また、富山教区共済会計からも100万円を拠出することとし、寄せられた救援金とともに、宗派の救援金口座に入金された。

教区共済会計拠出金	1,000,000円
教区内救援金	6,699,592円
教区合計額	7,699,592円 (2011年6月13日現在までの宗派救援金口座への振込み額)

#### 《継続的な救援活動を — 以後4カ年度の救援金勧募》

このたびの震災の状況から、一時の救援活動でおさまられるものではないとの判断から、教区としても、今後も継続的な救援活動が行われる。具体的には、今後4カ年度にわたって、各寺院には1万円を目標に救援金をお願いしていくこととし、1年目の集約日が2012年3月末日となっている。この継続的な救援金については、全て宗派救援金口座に入金するのではなく、その集約段階で、必要と思われる団体等に振り分けて入金することなども考えられている。なお、富山別院本堂及び東別院会館に救援金募金箱を設置するとともに、教区内寺院においても救援金募金箱の設置をお願いしている。

### — 救援金・支援金のお願い —

「真宗大谷派富山教区」「富山教区災害復興支援ネットワーク」では、救援金及び支援金の募集をおこなっております。今後も、継続的な救援及び支援活動を行ってまいりたく、ご協力くださいますようお願いいたします。

真宗大谷派富山教区 00700-5-22342  
加入者名：真宗大谷派富山教務所（「東日本大震災救援金」とご記入ください。）  
富山教区災害復興支援ネットワーク 14650-3527741  
加入者名：富山教区災害復興支援ネットワーク有志

### 「富山教区災害復興支援ネットワーク」設立

このたびの「東日本大震災」及び、「福島原発の放射能漏れ」という事態を受け、四月に「富山教区災害復興支援ネットワーク」(発起人 神保孝順氏) が設立された。このネットワークは、災害時における被災者への災害復興支援、また、平時においては、学習会及び研修会を開催し災害時に備えることを目的に設立された。現在は、「仙台仏青(BOP)」への支援や、現地復興支援センターにおける救援活動への参加、救援物資の調達や搬送などに取り組みしており、十年は活動することを目処としている。

#### 「富山教区災害復興支援ネットワーク」の主な活動(七月三十一日まで)

四月 十日 第十二組榮明寺にてネットワーク設立集会。  
二十一日 一泊二日で支援物資を仙台教務所(東北別院)へ搬送。現地復興支援センターへ挨拶。

五月 二十八日 現地の状況をネットワーク会員へ報告し、次回報告会の準備。  
一日 五一会でネットワークへの参加・支援の呼びかけ。

五月 十日 第一回報告会(東別院)  
十七日 第一回報告会(第十二組榮明寺本堂)  
三十日 二泊三日で石巻市雄勝町避難所での炊き出しに参画。支援物資・支援金を届ける。

六月 十日 参事会・常任委員会にて報告。  
十六日 一泊二日で、自動車及び支援物資を現地復興支援センター(東北別院)へ届ける。

六月 四日 第二回報告会(東別院)  
二十四日 「東日本大震災を心に刻む集会」富山

七月 四日 仙台仏青から私へ「」を開催。  
二十九日 別院暁天講座期間中にチャリティー朝顔を開催。

※「現地復興支援センター」については裏面で紹介。



ネットワークによる支援物資の整理作業

# 東日本大震災を心に刻む集会in富山

七月二十四日開催

「被災地の今」を聞いていただきたい

そして、仙台仏青のメンバーと、その活動を知っていただきたい

主催 富山教区災害復興支援ネットワーク



七月二十四日(日) 東別院 本堂において「東日本大震災を心に刻む集会in富山」が仙台仏青から私へ」が開催された。仙台教区から、お二人の仙台仏青のメンバーをお迎えし、被災地の現状や活動について、それぞれお話いただいた。

この集会では、「被災地の今」を生む声で聞くこと、そして、四月に立ち上がった「富山教区災害復興支援ネットワーク」

が支援する、仙台仏青のメンバーとこの活動を富山の人が知ってもらうことが目的であった。この瞬間も、仙台仏青のメンバーは動き続け、関係をつむぎ続けている。そのことを他人事としないためにも、彼らと言葉を交す機会が必要と感じ、開催された。

当日は、ご門徒、教区外僧侶を含め、約四十五名の参加をいただいた。こういった取り組みからも、今後の教区内でのネットワーク活動の広がりが願われる。

## 放射能から子どもたちを守りたい

佐々木 道範氏(仙台仏青会長 福島県二本松市在住)



福島市の現状(特に二本松市における動き)についてお話いただいた。自坊が保育園を経営していることもあり、自身も五人の子を持つ親として、放射能が子どもに与える影響についての不安を語っていた。状況を作り出したのは、彼らは当然として、自分自身もその一人だったと語られた。

夏休みの間だけでも、福島の子どもの放射能の影響の無いところで過ごして欲しいと、自身の園の子どもと保護者約二〇〇名を参加費無料(経費は全国の有志からの支援金)で北海道に旅行させる計画や、二本松市に「市民放射能測定所」をつくる運動(こどものたべもの基金)も実行中であることなどお話いただいた。

## 何もできない... 忘れないでほしい

石田 悠晃氏(仙台仏青メンバー 岩手県花巻市在住)



地震発生直後から活動を続ける仙台仏青。だが、その活動が本当に支援になっていくのか? 実感の無い部分を持ちながら、現在までの支援活動の中心を語っていただいた。それは、常に人とのかわりの中での支援活動で、これで良いというものは

ない。迷いながらの活動だが、それを支えてくれたのが、逆に支援を受けた人たちの言葉や笑顔だった。支援する人、支援される人という線引きを超えた出会いが、仙台仏青を動かしている。

最後に、「被災地では、まだまだ物資を必要としている人たちがたくさんいます、今後も息の長い支援をお願いいたします。私たちが忘れないで下さい」と、強く語られた。



放射能のため、マスク着用を余儀なくされている



被災された方々との交流 この笑顔が活動の支えになります

## 被災されたご門徒さんに御本尊が手渡されました

去る六月十六日、第十二組榮明寺のご門徒で、宮城県多賀城市のご自宅が被災された越前隆さんに、東北別院本堂において、榮明寺住職から三折御本尊が手渡されました。

越前さんは魚津市のご出身で、お盆には毎年必ずお墓参りに魚津を訪ねられるそうです。四月には唯一残った自家用車で、報告を兼ねてご夫婦で榮明寺まで来られたそうです。その時、津波に流される家の中の生死を分けた話や、多賀城で新調しお参りしていたお内仏や代々の法名軸の話などを聞いて、手次寺として何かしなければと思え立ち、仙台に赴き、三折御本尊が手渡されました。



# 震災と私

七月二十五日開催

私たち真宗門徒は、この震災をどう受けとめるのか

主催 富山教区坊守会

共催 富山教区災害復興支援ネットワーク



七月二十五日、「私たち真宗門徒は、この震災をどう受け止めるのか」を問う場として、公開講座を開催した。当日は六十名を超える方に参加いただき、この震災を決して人ごととしてはいけないう思いが強く感じられる場となった。講師は現地復興支援センター主任補佐の木ノ下秀俊氏で、自坊は南相馬市原町の生のお聞きしている、時間の経つのも忘れるくらい切実であり現実的であった。

木ノ下氏は「ふるさとを奪われたということの意味は、自分のこれまでの人生そのものをそっくり奪われたような気持ちです」と吐露され、そして、「親鸞聖人が、佐貫の地での三部経の千部読誦を途中で思いとどまられたこと、このたびの震災から見える人々の惨状や苦しみが重なり、親鸞聖人の気持ちが偲ばれる」とも言われた。

お経を読誦してもどうにもなるものではないことはわかっていても、この佐貫の状況を目にした時、読誦せずにはおれなかったのではないだろうか。そしてこのことは、比叡山を出て浄土門仏教に入り、民衆の中に在って関係を生きることに救いを求めていく生き方を選ばれた親鸞聖人の苦悩でもあったのではないか。その聖人が称えた念仏とは?と、課題提起された。

そして、本当の支援とは、同じ状況を、時代を、つながりをもって共に生きるということであり、そこにこそ念仏申すことが起こるのではないかと語られた。

私たち、親鸞聖人の教えを学ぶ者は、いただいた教えを表現しつづけていくことが責務であると教えられてきている。そこに立って、このたびの公開講座で感じたことを、一人ひとりがそれぞれの場で表現し、語り合い、活動へとつなげていく、今回の開催がそういう機縁になればと願われる。この「震災と私」は、明年二月末と三月末にも木ノ下氏に来富いただき開催される。



被災地の現状を見事に言いあてている中学生の手記を紹介いたします。歴史の中の今を担っている者の責任が問われていることを思いいます。

教区坊守会長 見義悦子

## 《中学生の手記》

私たちは福島県富岡町の中学生です。今回の震災、原発事故により、やむなく故郷を立ち去りました。今まで一緒に過ごしてきた仲間、先生方、地域の方々と離れ離れになり、連絡がとりたい人がいてもとれない状態が続いています。「温かい食事を食べる」「お風呂に入る」「洗濯した衣服を着る」「仕事をやる」という当たり前の生活が被災地にはありません。今も避難所の硬い床で寝ている人がたくさんいます。段ボール一枚で隣と区切られているだけです。

避難所から出て、知らない土地にアパートを借り生活している友達があります。親は仕事が無くなり収入が入ってきません。それでも、着の身着のまま逃げてきた人は本来の買う必要のないものにお金を使っています。津波で家が流され、仕事場が流され、家族が流され、仲間が流され、毎日が苦しくて悲しくてつらい人、家があるのに帰れない人、苦しむ理由はそれぞれですが、みんな毎日先が見えない現実と戦っています。

今の政府の対応には不満が募っています。もっと具体的に説明してください。計画的避難区域に指定される地域はなぜそうなったのか、漁業関係者が反対したのに低レベルの汚染水をなぜ海に流すのか。(中略)

全国に友達が散らばりました。電話で声を聞くだけです。仲間に会えず毎晩泣いています。顔を向き合わせ話したいです。大人は「もう戻れない」「戻るには十年かかる」と言っています。なぜ大人はそういうことしか考えられないのでしょうか。私たちは故郷に戻ります。いつか必ず戻るとみんなで約束しました。

## 真宗大谷派「現地復興支援センター」を設置

被災地の復興支援に少しでも協力したいという宗派内外の要望を受け、本年四月十五日、仙台教務所内に「現地復興支援センター」が設置された。

現地復興支援センターは、被災地におけるボランティア活動を行うための情報収集をはじめ、社会福祉協議会が行うボランティアへの受け入れ調整や、宿泊場所としての東北別院(仙台市宮城野区)の開放等を行い、被災寺院・門徒からの要請はもとより、より多くの方々に対しての復興支援を行うことを願っています。

〒983-0803 宮城県仙台市宮城野区小田原一丁目二番一六号(仙台教務所内)  
TEL 090-7345-5049 / FAX 022-297-2827(仙台教務所)  
E-mail otaniba-fs.center@watch.ocn.ne.jp